第89号
（創刊：1994年12月15日）

Hirosaki University Hospital Bulletin　弘前大学医学部附属病院広報

南塘（なんとう）だより

発行：弘大病院広報委員会
（委員長：伊藤悦朗副病院長）
〒036-8563　弘前市本町５３
TEL：0172-33-5111（代表）
FAX：0172-39-5189
http://www.med.hirosaki-u.ac.jp/hospital/

※南塘とは，弘前市史によると医学部敷地内にあった南溜池のことをいう。

2018年（平成30年）3月23日

病院長からの一言
働く職員にも優しい病院作りを

弘前大学医学部
附属病院長　福田 眞作

今，国会で「働き方改革」が活発に議論されています。労働者の職場の環境が改善されるイメージではありますが，悪用されれば「働かせ方改革」となりかねません。

さて，我が弘前大学医学部附属病院の勤務の実態はどうでしょうか？　医療職にある職員の業務のほとんどは患者さんに関わるものですので，業務量やその日のノルマを職員自身では調整することはできません。過剰な勤務とならないよう，本院でもタスク・シフティング（業務の移管）／タスク・シェアリング（業務の共同化）を推進しているところです。

大学運営上の制約や，非常勤であるが故に募集しても応募者がいないこと…などもあり，いまだ看護師，薬剤師等のメディカル・スタッフ不足が改善されていません。看護部のアンケート調査にもありますように，残念ながらまだまだ「職員の満足度」は低いと言わざるを得ません。

本院の使命は，「生命倫理に基づいた最先端の医療，医学教育及び研究を実践し，患者の心身に健康と希望をもたらすことにより，地域社会に貢献すること」であります。大学病院に勤務する職員にとって，患者中心の高度な医療を提供することは当然のことですが，患者さんの身近にあって，「痛み」，「悲しみ」や「喜び」といった感情を共有・共感できる資質も我々医療人には求められます。当直や夜勤明けに，患者さんから「先生（看護師さん），大丈夫？」と声をかけられたことがある職員が多いと聞いています。疲れを知らないロボットのような人間はまずいません（ごく稀にスーパーマンはいますが…）。私の経験からしても，自分の心身に余裕がなければ，患者さんに真に優しくはなれません。AIを搭載したロボットが，疲れを感じることなく，かつミスなく病院の雑務をこなしてくれるような時代の到来はまだまだ先の話です。まずは，多職種の職員が知恵を出し合いながら，タスク・シフティング／タスク・シェアリングを実践して頂きたいと思っております。もちろん，必要不可欠な人員に関しては，今後とも確保に努めてまいります。

４月から二期目の病院長を務めさせていただくことになりました。この２年間，自分なりに病院の改革に努めてまいりましたが，今後の２年間，まだまだ不十分な「働く職員にも優しい病院作り」を頑張ってまいります。皆様のご協力，何卒宜しくお願いいたします。

平成29年度医学教育等関係業務功労者表彰を受賞して

平成29年11月28日，文部科学省３階講堂において宮川典子大臣政務官，新井一全国医学部長病院長会議会長ご臨席のもと，表彰の栄誉をいただきました。受賞者は全国の国公私立大学の医学・歯学教育関係者105名で，式典は国歌斉唱から始まり表彰状・記念品の授与，大臣政務官挨拶，来賓祝辞，受賞代表者挨拶と厳粛な中にも，宮川政務官のやさしくにこやかな表情が場をやわらげあたたかい雰囲気の中，閉式となりました。その後，全員で記念撮影し終了しました。さすがに業務功労者の集まりは自信に満ちた表情の方が多く，その中に自分がいることが不思議でしたが，大変感激いたしました。

昭和56年４月に全国の大学病院に輸血部が新設されると同時に臨床検査部から異動しました。入職２年目のことです。すぐに東京大学医学部附属病院輸血部に３週間研修に行かせていただき手技を習ってきました。輸血業務に関する情報が極端に少なく，手探り状態で業務が行われていたため，手と目と感が鍛えられたと思います。

開設当初の輸血部スタッフは専任副部長１名，臨床検査技師２名，看護師１名で，業務は成分採血（血小板，白血球，血漿交換）が中心でした。血小板採血は年間300回程行われ，夜間の呼び出しも度々でしたが若さと気合で対応しました。今では笑い話ですが，ある時のドナーは体がキャンバス？の強面の兄さん。静まり返った室内，採血装置の無機質な回転音。何か言わなくちゃ。でも共通の話題が…。コミュニケーションスキルが向上するのはこのようなシチュエーションかも知れません。

輸血業務の24時間体制は平成９年９月から開始されました。今では全国どこでも行われていますが，検査部・輸血部合同による輸血24時間体制は当時画期的で全国から注目を集めました。惜しむらくはあと半年早ければ…国立大学では日本初。惜しかった。

輸血の発展とともに歩んで来ましたがこの春で定年退職します。毎日の業務を大過なく務めることが出来たことに加えこのような名誉を頂くことができたのは，尊敬する上司，同僚の支えがあってこそだと思います。ありがとうございました。とても楽しい38年間でした。

（輸血部　主任臨床検査技師　田中一人）

各診療科等の紹介
【小児科】

弘前大学小児科には，血液，循環器，腎臓，神経の４つのグループと青森県立中央病院を拠点とする新生児グループがあります。いずれのグループも，優秀な専門医が各々の専門診療，研究，教育を担当しています。今回は，４つのグループの診療内容についてご紹介させていただきます。

血液グループでは，血液疾患，小児がん，免疫不全症を中心に診療を行っています。県内のほとんどの血液・悪性腫瘍の患者さんが当科に紹介されてきます。日本小児がん研究グループに所属し，白血病や固形腫瘍の全国規模の臨床研究に参加しています。また，ダウン症候群のTAMや急性骨髄性白血病研究の中央診断施設の役割も果たしています。一方，難治性の血液疾患，小児がん，免疫不全症の患者さんに対しては，積極的に造血幹細胞移植を行っています。現在までに200例以上の造血幹細胞移植を行ってきました。最近では，HLA半合致血縁者間移植などにも取り組んでいます。

循環器グループは，先天性心疾患，不整脈，川崎病に伴う心血管後遺症などの小児心疾患の診療を行っています。心臓病の子供たちが胎児から成人まで，その一生を通して最良の生活ができるよう診療を行っています。複雑心奇形に対する心臓血管外科との協同診療体制の充実により，この十年で治療成績が格段に向上しました。また，産科との連携による胎児心疾患の診断が進歩し，重篤な心疾患をもつ患者さんの多くが，出世前に弘前大学に紹介されて来るようになりました。この結果，県内のほとんどの先天性心疾患は弘前大学で治療を受けて，救命できるようになっています。

腎臓グループは小児腎臓病，自己免疫性疾患，アレルギー性疾患を対象として診療を行っています。特に，免疫抑制剤を用いた難治性腎疾患の新しい治療の開発に力を入れています。腎疾患では，先天性腎・尿路系疾患，各種の腎炎症候群，ネフローゼ症候群，急性・慢性腎不全を，自己免疫性疾患では，全身性エリテマトーデス（SLE），若年性特発性関節炎，血管炎症候群などを担当していますが，豊富な症例から得られた貴重な臨床知見や臨床研究の成果は国内や海外の学会で発表され，英文での論文報告として広く公表されています。

神経グループは，小児神経疾患，筋疾患，一部の代謝疾患の診断・治療ならびに早産児の成長発達，発達障害児のフォローアップを中心に診療を行っております。小児神経疾患では，急性脳症，自己免疫性脳炎のような集中治療を要する疾患や，難治てんかん，大脳白質変性症，ギランバレー症候群，水頭症，二分脊椎等，幅広い疾患の診療を行っております。また進行性筋ジストロフィー，先天性ミオパチー等の筋疾患についても遺伝子検査，筋生検による診断，治療を積極的に行っております。

（小児科　伊藤悦朗）

院内ファッションショーを開催

本院では，患者サービスの一環として，「院内コンサート」を実施しております。１月24日，本院では初の試みとなる院内でのファッションショーを開催いたしました。

ファッションショーは，「ファッション甲子園」の常連校でもある弘前実業高校服飾デザイン科３年生の皆さんが，自らモデルとなり，15のテーマに沿った独創的なデザインの作品を披露しました。会場に足を運んだ患者さんやそのご家族だけでなく，病院職員も魅了されました。

最後に生徒代表の方からの，これまでの自分達の活動や患者さんに対する思いを綴ったあいさつは感動的でした。ファッションショー終了後には，生徒さんから一言メッセージが添えられた「ミニトートバック」（生徒さん自作）が来場した患者さんへプレゼントされ，喜んでいただきました。

今回のファッションショーを提案いただいた弘前実業高校の小田桐都先生に感謝するとともに，このファッションショー開催を後押しいただいた看護部・病院事務部の皆さま，そして病院長先生にお礼申し上げます。

（医事課）

先憂後楽
「備えあれば憂いなし」に向けて

病院広報委員　総務課長
三浦　信義

災害対策関連業務の取り纏めを総務課が担っていることもあり，今回はその取組をご紹介させていただきます。まず始めに，災害対策マニュアルについてですが，事業継続計画（BCP）の考え方を取り入れて2017年６月第２版（全面改訂版）が完成しました。同年11月17日，この改訂版災害対策マニュアルに基づき，総合防災訓練が実施されました。１年間に平日の日勤帯にスタッフが勤務している時間は，全体の４分の１程度であり，勤務スタッフが少ない時間帯に災害が起きる可能性の方が高いことから，今年度は休日の日中に発生した地震（震度６弱）を想定した訓練を平日の時間帯に行いました。準備不足等もあって混乱が生じましたが，問題点を参加者が把握できる機会となりよかったと思っております。次に，同年12月26日災害用備蓄倉庫を中央診療棟地下１階に設置させて頂きました。ここには災害対策に伴い初期の段階で使用する物品を中心に保管する準備を進めております。最後に，「事業継続計画：BCP（business continuity plan）」についてです。東日本大震災では，地震（震度４）で弘前市内の横揺れが長く続き，本院の建物や設備への直接的被害がなかったものの，間もなく停電となり，手術中患者や重篤な入院患者への迅速な対応や入院患者及び職員の安否確認並びにライフラインの確認などの対応に追われ，直ちにやるべきことが沢山あるのに通信手段が絶たれていたため迅速な対応を妨げられることとなりました。また，医薬品や医療材料の在庫が不十分であったこと，自家発電用燃料（重油）が足りなかったこと等の問題も発生しました。当時は，「不測の事態」に対する具体的なイメージに欠けていたことに加えて，必要な措置に対応するための「備え」が足りなかったものと考えられます。そこで業務継続のための指揮命令系統を確立し，業務遂行に必要な人材・資源，その配分を準備・計画し，タイムラインに乗せて確実に遂行するための事業継続計画（BCP）を策定しております。事業継続計画（BCP）は大規模災害等が発生した際，例え「想定外」の事態に遭遇した場合でも，職員が一丸となって対応し業務遂行するために活かされる計画とすることが求められます。早期にこの体制を整え，本院が地域医療の「最後の砦」としての機能を維持できるようにするため，引き続き皆様のご協力を賜ることとなりますのでどうぞ宜しくお願いいたします。

平成29年度弘前大学医学部附属病院診療奨励賞授賞式が行われる

第20回附属病院診療奨励賞授賞式が医学部各授賞式と共に，平成30年１月19日に医学部コミュニケーションセンターで執り行われました。式では受賞者に，福田病院長から本賞の楯及び副賞として一般財団法人弘仁会から寄附金が贈呈されました。今年度は診療技術賞，検査部（代表一戸香都江外11名）の「弘前大学医学部附属病院検査部生理検査室における平成25年度から平成28年度の超音波検査業務充実に向けての取り組み～大学病院として相応しい意識改革・環境整備・人材教育・地域貢献～」，泌尿器科（代表畠山真吾外８名）の「歩行スピードを取り組み入れた高齢者脆弱性（フレイル）評価法の確立」，心のふれあい賞，栄養管理部（代表三上恵理外29名）の「患者給食に選択メニューを取り入れて」が受賞しました。授賞式に引き続き祝賀会が同センター内で和やかに行われました。（総務課）

弘前大学医学部附属病院検査部生理検査室における平成25年度から平成28年度の超音波検査業務充実に向けての取り組み
～大学病院として相応しい意識改革・環境整備・人材教育・地域貢献～

検査部　一戸香都江，武田美香，赤﨑友美，近藤　潤，佐々木史穂，飯田真悠，渡邊美妃，長尾祥史，佐藤秀信，小山有希，佐藤めぐみ，北川郁子

○診療技術賞を受賞して

代表　検査部
（医療技術部検査部門）
主任臨床検査技師　一戸香都江

この度は名誉ある第20回弘前大学医学部附属病院診療奨励賞・診療技術賞を受賞することができ，大変光栄に思っております。この場をお借りして受賞の報告と検査業務充実に向けての取り組みについて報告させていただきます。今回の主題は「弘前大学医学部附属病院検査部生理検査室における平成25年度から平成28年度の超音波検査業務充実に向けての取り組み～大学病院として相応しい意識改革・環境整備・人材教育・地域貢献～」であり，生理検査業務を対象に５Ｓと断捨離を基本としたPDCAサイクル活動や，信頼できる検査業務と質の向上を目指したものです。職場環境改善目的にて物品・機器・非効率業務の削減，業務固定化の改善やスキルアップなどに力を入れました。またカンファレンスの定期開催，近隣施設の研修受入れ，医師への指導など意欲的に実施し，更には地域貢献として岩木健康増進プロジェクトに平成26年度から関わり，心臓超音波検査を４年間で約4,500人実施するなど青森県の健康増進に寄与しています。なお，現在は生理検査担当技師12名のうち９名が超音波検査を担当し，超音波検査士はこの数年で３名が取得し７名（心臓６名，腹部１名，体表１名，血管診療技師１名）となっています。この様な取り組みの結果，超音波検査項目は３項目から13項目（心臓・小児心臓・頸動脈・下肢静脈・下肢動脈・腎動脈・腹部・甲状腺・小児甲状腺，リンパ浮腫上肢・リンパ浮腫下肢・関節・胸腹部）と増え，件数は平成24年度2,050件（UCG・1,394件）でしたが，平成28年度6,317件（UCG・4,143件）と収益も高増収となり大きな貢献となったと自負しております。最後に今回の受賞に際しまして，ご支援頂きました臨床検査医学講座萱場広之教授，循環器腎臓内科学講座富田泰史教授，山田雅大先生，そして生理検査担当技師の皆様，特に超音波検査に関わった技師の皆様には，心から感謝を申し上げます。

患者給食に選択メニューを取り入れて

栄養管理部
三上恵理，嶋﨑真樹子，平山　恵，横山麻実，相馬亜沙美
日清医療食品株式会社
阿部真由美，長内麻美，須藤　理，木村詩織，秋元陽子，福士陽子，板垣優香，西村侑寿子，田名部眞友子，吉田美穂，森本留美，小山内英樹，長内晴美，佐々木隆行，高橋慶江，一戸　緑，藤田義雄，佐々木篤也，安田俊一，神　吉人，小神玲子，宇野大地，阿部廣巳，清藤龍治，川村絵美

○心のふれいあいを受賞して

代表　栄養管理部
管理栄養士　三上恵理

このたびは思いがけず「心のふれあい賞」をいただき大変嬉しく思っております。病院長先生ならびに選考してくださった先生方，関係の方々に厚く御礼申し上げます。

病院の食事は，「集団給食」というイメージが強くありますが，患者さん一人一人の年齢や病態に合わせ，栄養バランスはもちろん，旬の食材や行事にちなんだ料理をメニューに取り入れ，治療効果のある安全でおいしい食事の提供を心がけています。

患者給食に選択メニューを取り入れたきっかけは，患者さんから「入院中の楽しみは食事」という声をいただくことが多く，患者さんに食事をもっと楽しんでもらいたいと考え，水曜日から土曜日の週４回，昼食と夕食にＡメニューとＢメニューの２種類の献立から，好きなメニューを選ぶというスタイルではじめました。メニューの内容は「肉の甘辛煮」か「エビチリ」，「みそカツ」か「ぶりの照煮」，「えび天うどん」か「中華飯」など，幅広い年齢層の入院患者さんの嗜好に対応できるよう工夫しています。

選択メニューの実施は，調理作業のみならず，選択用紙の配布や回収，オーダーの入力などすべて手作業でおこなっているため，非常に人手のかかる作業ですが，給食業務受託会社のスタッフの協力のもと，入院患者さんの楽しみを支える給食サービスとなっています。選択メニューは，入院患者さんから大変好評で「やまびこ」に投書をいただいたり，下膳のトレーに労いのメッセージを忍ばせてくださったりと，患者さんの声がわれわれの励みとなっております。

食事には人を喜ばせたり，心を和ませたりする大きな力がありますが，病院の食事には治療への意欲を高めるという側面もあります。自らが選んで食べる選択メニューは，ささやかながら患者さんの意志を尊重する自己決定の場であるということを忘れずに，今後とも患者さんと心ふれあう給食サービスと臨床栄養を目指して努力して参りたいと思います。

看護部では，平成29年12月から公式Twitterを始めました。

看護部リクルートワーキンググループが中心となって発信し，就職活動中の学生さんへ，患者さんの看護以外での看護師の姿も紹介できればと思っています。研修風景，学会活動，部署の行事，働きやすさ，就職情報などをツイートしています。

今後も，より多くの方に見ていただけて，就職希望者にアピールできる内容を発信していきたいと思っております。（看護部）

歩行スピードを取り組み入れた高齢者脆弱性（フレイル）評価法の確立

泌尿器科
畠山真吾，米山高弘，山本勇人
泌尿器科学講座
古家琢也
先進移植再生医学講座
橋本安弘，今井　篤
第二病棟５階
相馬美香子，佐々木真紀，木村素子

○診療技術賞を受賞して

代表　泌尿器科
講師　畠山真吾

泌尿器科と第二病棟５階看護師を代表し，診療奨励賞・診療技術賞を受賞させていただきました。受賞タイトルは「歩行スピードを取り組み入れた高齢者脆弱性（フレイル）評価法の確立」です。ご協力いただきました皆様に，この場を借りて深く御礼申し上げます。

高齢化に伴い，80歳以上の患者さんが入院されることが多くなってきております。高齢者患者さんは何かしらの身体的予備力低下（脆弱性＝フレイル）を抱えているため，安全な医療のためには，フレイルを評価し反映させる必要があります。特に術後せん妄や転倒などのフレイル関連合併症は看護・ケアの妨げになり，在院日数の延長や医療費の増加に直結し，医療安全上も非常に重要です。しかし，どの患者に起きるかを予測するのは容易ではありませんでした。そこで我々は2013年より簡便なフレイル評価として歩行スピード測定を導入しました。その結果，歩行スピードは術後に引き起こされるせん妄や転倒イベントと強い相関を認めることがわかりました。この結果を受けて，今までの経験主体の対策から歩行スピード測定を用いたリスク評価が可能となり，高リスク患者に対する重点的な看護・ケアが行えるようになりました。

我々が用いた評価法はTimed Get Up and Go test：TGUGと言い，椅子に座った状態から立ち上がり，３m歩行し，また椅子に座る，という動作の時間を測定する検査で，簡便に数分で測定できます。泌尿器科における術後せん妄に対するTGUGカットオフ値は13秒以上でしたが，他の日本人を対象とした研究でも12～13秒とする報告が多く，「TGUG13秒以上」は多くの診療科でも広く応用可能と考えられます。この度，我々の試みが評価され，本賞を受賞できたことは大変喜ばしいことであり，今回の受賞をきっかけとして，多くの診療科でTGUGを導入していただければ幸いです。

最後になりましたが，本研究のご指導を頂きました泌尿器科学講座の大山力教授，教室の皆様，フレイル測定に多大なるご尽力をいただいた病棟看護師の皆様にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

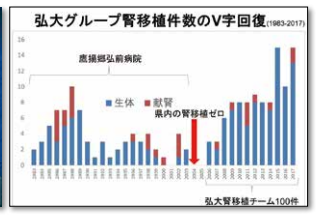
弘大腎移植チームの腎移植が100件に到達しました！

日本で慢性腎不全患者に対して最初に腎移植が行われたのは1964年で，青森県ではその僅か３年後の1967年に弘前大学医学部附属病院第一外科の山本実先生が第一例目の腎移植を実施しました。その後，鷹揚郷弘前病院，八戸市民病院，八戸平和病院でも実施されるようになり，本県は腎移植のパイオニア的役割を果たしていました。

ところが，2004年には全国的な医師不足を背景に，県内で腎移植が１件も実施されないという事態に陥り，腎移植を希望される患者さんは東京，仙台，秋田など遠方の施設を受診せざるを得ない状態になってしまいました。

そこで，この窮状を打開するために，2005年に附属病院の診療科の枠組みを超えた新しい腎移植ユニットである「弘大腎移植チーム」が立ち上がり，2006年６月に第一例目の生体腎移植を実施しました。臓器移植は究極のチーム医療です。泌尿器科，消化器外科，腎臓内科の医師が協力しながら，さらに病理部，薬剤部，麻酔科，手術部，看護部，検査部の援助を頂きながら，一例一例実績を積み重ねました。そして，2017年11月に「弘大腎移植チーム」による腎移植が100件に到達しました。生着率も非常に良好で，５年生着率は生体で97%，献腎で100%となっています。これを記念して，１月25日に「弘大腎移植記念講演会」を開催しました。（写真）

現在，青森県内の腎移植認定施設は本院，八戸市民病院，鷹揚郷弘前病院の３か所になっていますが，どの施設も急な対応が要求される脳死下あるいは心停止下の腎移植に単独で対応するのは容易ではありません。そこで，県内の献腎移植に対応するために，施設の枠組みを超えた「腎移植チーム青森」を形成し，３施設で実績を上げています。定時手術が可能な生体腎移植は本院で実施し，緊急対応が必要な献腎移植は本院の「弘大腎移植チーム」が鷹揚郷弘前病院の手術場で移植をします。また，八戸市民病院で脳死下の臓器提供が出た場合にも本院のチームが鷹揚郷のスタッフと共に摘出チームを形成して支援します。



このような既成の枠組みを超えた腎移植実施体制は全国的にも類がなく，「弘大方式」「青森方式」として注目を集めています。そして，2017年２月には，本院から初の脳死下臓器提供が実現しました。弘大病院の事務の皆さんにも大変素晴らしい対応をして頂き，初めてとは思えないような円滑な臓器提供でした。臓器不全に苦しむ患者さんにとって，唯一の根本治療となるのが臓器移植です。「弘大腎移植チーム」の腎移植100件は単なる一里塚に過ぎませんが，これまでの皆様のご理解とご支援に感謝申し上げます。

（泌尿器科学講座　教授　大山　力）

弘前大学医学部附属病院へのご寄附，心より御礼申し上げます

ご氏名の掲載をご承諾いただいた方に限り，ここにご芳名を掲載させていただきます。

今号では，平成29年11月から平成30年1月末までの間にご入金を確認させていただきました方を公表させていただきます。（経理調達課）

寄附者ご芳名

森山　裕三 様　　石澤　誠 様　　鈴木　秀和 様

【 編集後記 】

南塘だより第89号をお届けいたします。原稿をお寄せいただきました皆様には心より感謝申し上げます。本号は各種受賞関連の記事を多数いただきました。平成29年度医学教育等関係業務功労者表彰、附属病院診療奨励賞受賞おめでとうございます。益々のご活躍を祈念しております。また、弘大腎移植チームの腎移植100件、院内ファッションショーなどの明るい話題も掲載することができました。関係各位に心より感謝申し上げます。さて、看護部でツイッターが始まったようです。ツイッター未経験の小生としましては、今後どのような効果が生まれるか、全く不勉強ですが、広く情報を発信し、安全かつ快適な医療を提供できるよう発展を期待しております。関東でも大雪が降ったり、まだまだ寒波が続いておりますが、体調など崩されませんようにご自愛ください。（病院広報委員　畠山真吾）